

2024年7月13日
土曜の放課後：吉岡洋とゲストによる
哲学とアートのための12の対話 2024

大正大学客員教授・龍谷大学客員教授
上智大学グリーンケア研究所客員所員
NPO東京自由大学学長・東京大学名誉教授
島菌進

1

「また、一般的に宗教の範疇には入らないが、人類を幸せにするものとして多くの人が共有する思想（たとえば儒教、哲学、マルクス主義など）との比較で理解するという方法もあるでしょう。

本書では、「現代に生きる私たちは、救済宗教に距離感を感じている」という意識を通して、救済宗教について考えていきたいと思います。近代以降、宗教になじめない、宗教はもう受け入れられない、という人が社会全体で増えてきましたが（この状況を「世俗化」と言います）、その流れのなかに現代の私たちもいます。自分たちはもう宗教を卒業した。我々は、過去においてとても有力だった精神文化の「あと」（post-）にいる——救済宗教への距離感は、現代人のそのような意識と関わっているように思えます。

さらに言えば、現在、多くの人はそもそも自分と宗教がどのような関係にあるのか、よくわからないままなのではないでしょうか。それに対する手がかりは学校教育では与えられることはなく、ジャーナリズムが意識的に提示することも少ない。「世俗化」が進むあいだに、宗教への無関心、さらには宗教軽視の態度が養われ、そこからうまく脱却できないでいるからでしょう。

しかしいま、新しいかたちでの「宗教の学び」が求められていると私は思います。」 p7-9

3

1. 救いの身近さと救済宗教の縁遠さ

「本書の課題は大きく二つあります。一つは、なぜ「救い」がかくも重要だったのか、あるいはいまも重要であり続けているのかを理解する、ということです。「救い」が重要であることの前提には、「人間は救われる必要がある」という認識があります。つまり、ここでは人間が救われていない状態、すなわち苦難、悪、死など、人間が深く悩まざるを得ないネガティブな領域というものが強く意識されている。そのことをどう理解するか。

もう一つは、「救い」や救済宗教が、現代に生きる私たちとどのような位置・関係にあるのかを考える、ということです。救済宗教を理解するためには、救済を重視しない宗教（たとえば自然宗教）と比べるという方法があります。」



2

◇「『癒し』なら身近だけど、『救い』はちょっと敷居が高い」「救いを掲げる宗教に近づくことは、何となく怖い」。そう思う人も少なくないかもしれません。

一方で、「救い」という考え方そのものが、宗教という枠組みを離れ、映画や物語、歌など身近な芸術作品などの中に出てくると、多くの人に共感を持って受けとめられる、ということがあります。

「…アメリカのフォーク・デュオ、サイモン&ガーファングルの「明日に架ける橋 (Bridge Over Troubled Water)」です。この歌は1970年に発表され、世界中で大ヒットしました。はっきりと宗教的な「救い」を描いている歌ではありませんが、実はこの歌も、宗教的な思想に根差したゴスペルに影響を受けていると言われています。」

When you're weary
Feeling small
When tears are in your eyes
I will dry them all

I'm on your side
When times get rough
And friends just can't be found

Like a bridge over troubled water
I will lay me down
Like a bridge over troubled water
I will lay me down

4

「この歌の歌詞では、**生きるのに絶望し、疲れ果てている人に語りかけるような言葉が続きます。自分もう生きるのに絶望し、疲れ果てている人に語りかけるような言葉が続きます。自分もう生きている値打ちもない、ちっぽけだと感じ、ただ涙が溢れてくる。**そんな人に向けて、私があなただの涙を拭いてあげよう、と語りかけています。誰も助けてくれる人はいない、ひとりぼっちで苦しみに耐えていかななくてはならない、そんなことは自分にはできない—**そんな悲歎に暮れている人に、私がい**るよ、**激しい涙の流れに架かる橋のように私の身を捧げてあげる、**このように歌っています。

続く二番では、夜の街角でひとりきりのあなたに向けて、**暗闇のなかですべてが苦しみと感じられるとき、私があなたの支えになると**歌われ、三番では**いまこそあなたが輝くとき、そんなときもひとりきりじゃない、私がすぐ後をついていくと、立ち上がる「あなた」**を後押しする言葉が歌われています。

5

「この歌は、とてもつらい状況にある愛する者のために、自分が犠牲になるようにして、その人を助けると伝えている歌です。こうした「あなた」に語りかける歌というものは、**最愛の人への語りかけと、神への語りかけが、しばしば交じり合っている**ようなところがあります。人間同士の愛というものが、ある度合いを超えると神への愛に通じるようなものになる。「明日に架ける橋」もそうした歌の一つだと言えます。

この歌の歌詞は、**スワン・シルバーストーンという黒人ゴスペルグループが歌い、1959年に大ヒットした「Mary Don't You Weep」の影響を受けている**といわれています。そこには、「地上の難儀はもうすぐみな終わる」という内容の言葉が見られます。「泣くなマリア」という題が示唆するように、このゴスペルソングは「ヨハネによる福音書」11章でイエスがぎょうだいラザロの死を悲しむベタニアのマリアをいたわり、ラザロを蘇らせる場面を背景にしているとされます。そこには「もし信じるなら、神の栄光を見ると言ったではないか」という一節があります。まさに救いのメッセージです。」 p47-49

6

◇中山みき (1798-1887)

- ◎大和盆地。現在の天理市。庄屋敷村の比較的豊かな農家の主婦。
- ◎2人の娘の死。夫善兵衛の不倫。息子の足の病気。
- ◎1838年10月23日。市兵衛の寄加持（憑祈祷）の加持台となる。

「**我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび世界一れつをたすけるために天降った。みぎを神のやしろに貰い受けたい**」

◎善兵衛「子供は小さい、今が所帯盛りであるのに神のやしろに差上げては、後はどうしてやって行けるか…」

◎10月26日。善兵衛「月日（神）のやしろ」となることを承諾。月日親神の信仰へ。

◇金光大神（赤沢文治）（1814-83）

- ◎岡山県浅口郡大谷村（現、浅口市金光町）。金光←金神駅。
- ◎家系の継承が困難な家に養子入り。次々と子供（長男、長女、次女）を失う。
- ◎42歳のとき、自らのどの病気に石鎚講の先達の憑依で神の救いの言葉を聞く。
- ◎続いて、大地の神＝金神が崇りの神ではなく、恵の神であるとの悟りへ。

◇救いの信仰＝苦難・悲嘆＋いのちの恵み

◎中年期の苦難・悲嘆の経験、民俗宗教の経験を経て、新たな救いの信仰へ。

7

◇伝統宗教から新宗教へ

- ◎死後の救い。
- ◎現世否定。
- ◎エリート優先。達人と俗人（聖職者と平信徒）。
- ◎救いの受け手。受動性。
- ◎排除。真理の独占。
- ◎「救い」の狭さ。

◇新宗教の敷居の高さ

- ◎教祖崇拜・指導者崇拜
- ◎現世利益。
- ◎布教・献身・奉仕義務の拡充。組織利益への従属。
- ◎集団の優位。個人の従属。
- ◎新たな排除。
- ◎「カルト」と区別がつかない人が多い。

8

II. 神と／人とともにいるということ

・マリア・フリーデンホスピス（ドイツ）

「安らぎと平和を求めて」

受け入れ

社会的、
民族的な出自、
宗教に関わらず
全ての人が
無条件に
歓迎される。



9

詩編 130（デ・プロフンディス）

深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。
主よ、この声を聞き取ってください。
嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。

主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら
主よ、誰が耐えましょう。
しかし、赦しはあなたのものにあり
人はあなたを畏れ敬うのです。

わたしは主に望みをおき
わたしの魂は望みをおき
御言葉を待ち望みます。
わたしの魂は主を待ち望みます
見張りが朝を待つにもまして
見張りが朝を待つにもまして。



ルオー「深き淵より」

10



訪問看護ステーションコスモス ↓ @山谷



コスモスハウスおはな（宿泊所） ↓



↑マリア・フリーデンホスピス
（ドイツ）



↑光照院@山谷
（吉水岳彦住職）

11

少年院での読書会と個人面談の経験から

・新美南吉「うた時計」

「二月のある日、野中のさびしい道を、十二、三の少年と、皮のかぼんをかかえた三十四、五の男の人とが、おなじほうへ歩いていった。（中略）／「ぼう、ひとりどこへいくんだ。」／男の人が少年に話しかけた。少年はポケットにつこんでいた手を、そのまま二、三度前後にゆすり、人なつっこいえみをうかべた。「町だよ」（中略）／

「ぼう、なんて名だ。」「れんていうんだ。」「れん？れん平か。」
「ううん。」と少年は首を横にふった。「じゃ、れん一か。」「そうじゃないよ、おじさん。ただね、れんていうのさ。」「ふうん。どういう字書くんか。連隊の連か。」「ちがう。てんをうって、一を書いて、ノを書いて、二つてんをうって……」「むつかしいな。おじさんはあまりむつかしい字は知らんよ。」／少年はそこで、地べたに木ぎれで〈廉〉と大きく書いてみせた。「ふうん、むつかしい字だな、やっぱり。」



12

「ふたりはまた歩きだした。」／「これね、おじさん、清廉潔白の廉で字だよ。」「なんだい、そのセイレンケツパクてのは。」「清廉潔白というのは、なんにもわるいことをしないので、神さまのまえへ出ても、じゅんさにつかまってもへいきだということだよ。」
「ふうん、じゅんさにつかまってもな。」

廉は男の人のポケットに手を入れていいか、尋ねる。「入れたっていいよ」。入れてみると、何か冷たいものがある。そこにうた時計（オルゴール時計）があった。廉はよく遊びに行く薬屋のおじさんがだじにしているうた時計のことを思い出して、その話をする。日露戦争で死にかかった後、凱旋して帰るときに大阪で買ったものだという。

「おじさんはね、うた時計をきくとね、どういうわけか周作さんのことをおもいだすんだって」「えっ……ふうん。」「周作って、おじさんのこどもなんだよ。不良少年になってね、学校がすむとどっかへいっちゃったって。もうずいぶんまえのことだよ。」「その薬屋のおじさんは、その周作……とかいうむすこのことをなんとかいつてるかい。」「ばかなやつだって、いつてるよ。」「そうかい。そうだなア、ばかだな、そんなやつは。あれ、もうとまったな。ぼう、もういちどだけならしてもいいよ。」

「ぼう、すまんけど、この時計とそれからこいつも（と外とうの内かくしから小さいかいちゅう時計をひっぱりだして）まちがえてもってきちゃったから、薬屋にかえしてくれないか。な、いいだろ。」「うん」／少年はうた時計とかいちゅう時計を両手にうけとった。「じゃ、薬屋のおじさんよろしくいつてくれよ。さいなら。」「さいなら。」「ぼう、なんて名だったっけ。」「清廉潔白の廉だよ。」「うん、それだ、ぼうはその清廉……なんだっけな。」「潔白だよ。」「うん、潔白、それでなくちゃいかなぞ、そういうりっぱなしょうじきなおとなになれよ、じゃ、ほんとにさいなら。」「さいなら。」後略

この物語を読んだ子どもたちに問いを投げかけながら、感想を話してもらった集いを行った（物語読書会）。

そして、その数週間後に、個人面談でそのときの読書会を中心に、4回にわたった読書会についての感想を対面で話してもらった。

「ほんと？……ああ、いい音だなア。ぼくの妹のアキコがね、とつてもうた時計がすぎでね、死ぬまえにもう一ぺんあれをきかしてくれってないでぐずったのでね、薬屋のおじさんとこからかりてきてきかしてやったよ。」「……死んじゃったのかい。」「うん、おとしのおまつりのまえにね。やぶの中のおじいさんのそばにお墓があるよ、河原からおとうさんがこのくらいのまるい石をひろってきて立ててある、それがアキコのお墓さ、まだこどもだもんね。そいでね、明日にぼくがまた薬屋からうた時計をかりてきて、やぶの中でならして、アキコにきかしてやったよ。やぶの中でならすと、ずずしいような声だよ。」「うん……」

少し歩きながら、周作は昔のことを思い出して、廉に話したりするが、別れ道に来る。「さいなら」と言って別れたが、その後、「ぼうう、ちょっとまてよオ」と遠くから周作が声をかける。

「じつはな、ぼう、おじさんはゆうべその薬屋の家でとめてもらったのさ。ところがけさ出るときあわてたもんだから、まちがえて薬屋の時計をもつてきてしまったんだ。」「……………」

Ⅲ. なぜ私だけが苦しむのか？

H.P.クシュナー『なぜ私だけが苦しむのか—現代のヨブ記』岩波書店、1998年——（東京自由大学「なぎさ」より）

<https://nagisamagazine.wixsite.com/t-jyudaigaku/post/宗教の名著巡礼-第12回>

世界的ロングセラー

この書物は英語版初版が1981年に、第2版が89年に出されている。日本語版は1985年にダイヤモンド社から『ふたたび勇気をいだいて—悲嘆からの出発』と題して刊行されている。私が手にしているのは98年に岩波書店から同時代ライブラリーとして刊行されたものである。日本語版初刊の「訳者あとがき」には、本書はアメリカでは、出版後3年で約16万冊もが読者の手に渡っており、すでに8ヶ国語に翻訳されているとある。日本語版も多く読者に読まれて来たようで、2008年には岩波現代文庫版として再刊されている。



息子アローンの病と死

原題は、When Bad Things Happen to Good People であり、直訳すれば、『善き人に悪いことが起こるとき』となる。これは著者自身に起こったことを想起させる題である。著者自身に起こったことは、「なぜ私はこの本を書いたか」という序章の冒頭に記されている。本書本文の最初の文は、「これは、神や神学についての抽象的な本ではありません。もったいぶったことばや知的な言いまわしで問題をすり替えて、私たちにふりかかる苦しみは、ほんとうは苦しみでなく、当人がそう思い込んでいるにすぎない、などと言いくるめようとする本でもありません」というものだ。そして、「これはきわめて個人的な書物です」と続く。

私たちの娘のエイリエルが生まれた時、息子のアロンは3歳の誕生日を迎えたばかりでした。アロンは聡明で元気な子でした。2歳にならないうちに、たくさんの種類の恐竜の名前を覚えていましたし、恐竜が絶滅したことを大人たちにしんぼう強く説明していたものです。(xvii ページ)

ところがそのアロンはからだの成長が異様に遅かった。生後8ヶ月で体重の増加がとまり、1歳になったころから髪が抜けおちはじめたという。著名な医者に診てもらったが、身長はあまり伸びないが、その他の点では正常に発達するだろうと話してくれた。ちょうどその頃、著者はニューヨークからボストンの郊外に引っ越し、ユダヤ教のラビに就任した。移転先のボストンで、子供の成長障害を研究している小児科医がいることを知り、診てもらうことにした。

2ヶ月後——娘の生まれた日——に、その医師は産科に入院中の妻を訪れ、アロンの症状は「早老症(プロゲリア)」と呼ばれるものであると私たちに告げたのです。彼はことばを続けました。アロンは身長はせいぜい1メートルどまり、頭や体には毛もはえず、子供のうちから小さな老人のような容貌を呈し、十代のはじめに死ぬだろうと……。 (xviii ページ)

なぜ私が、なぜ私たちが？

「どうして私にこんなことが起こるのか」という問いが著者の心に浮かんでくる。「この不公平な出来事に対する深い痛みには私はとらわれていました」。自分は悪い人間ではない。ラビになろうというのだから、神の前に正しいとされる生き方をしようと思っていたはずだ。それなのに、なぜ私の家族にこんな不幸がおそいかかってきたのか。私自身は気づいていないだけで、怠惰や高慢の罪があるのかもしれない。

「だが、その罰があるとして、なぜそれをアロンが受けなければいけないのか。無邪気で幸福で活発な3歳の子だった。その息子が、やがて肉体的にも精神的にも苦しみ続けなくてはならなくなる。人々からはじろじろ見られたり、指さされたりしなくてはならないだろう。家族をもつこともなく、大人としての未来がなく、早く世を去るであろうことを知る、それもそう先のことではない。アロンの誕生日ごとに彼との別れが近づいて来る。家族はそのことを痛切に意識することになる。事実、14歳の誕生日の2日後にアロンは死んでいった。

ほとんどの人と同じで、妻も私も、神は実の親と同等か、あるいはそれ以上に親身に人のめんどうをみってくれる全知全能の存在であると信じて育ってきました。もし、人が素直で従順であれば、神はきっとそれに報いてくれるだろうと信じていたのです。人が道を踏みはずすようなことがあれば、しぶしぶながら厳しく戒めてくれるのが神だと考えていたのです。神は、人が傷つくことのないように守り、自分で自分を傷つけたりすることがないように守り、人がその態度や行いにふさわしい人生を送るように見守ってくれる、と思っていたのです。(xix-xx ページ)

苦しみ悲しんだ当事者の証言として

著者が死にゆくアロンの生を見守り、やがて死別に見舞われる時、著者や家族の助けになった本や人は多くはなかったという。

私の読んだ多くの本は、神の栄光を守ろうとすることに重きを置き、理論的な証明でもって、悪はほんとうのところは善であり、悪はこの世界を善いものにするために必要なのだと述べるのみで、死につつある子供をかかえる親たちの苦悩や困惑を癒そうとするものではありませんでした。(xxii ページ)

「そうした本に書かれていないこと——それは人の悲しみを体験し、かつ根本的に神を信じる者こそが伝えることができるものだ。「死や、病気やけが、そして拒絶や失望によって人生に傷ついた人のために」なること、そして、「この世に正義があるなら、こんなことが自分に起こるのはまちがっていると考えている人」の心に響くもの——それこそ著者が伝えたいことだ。

「もし、それができるとすれば、「私は、アロンの痛みと涙からいくばくかの祝福を取り出せたことに」なると著者は記している。

この本はアロンの本だ、と著者はいう。苦しみ悲しんだ当事者の証言——それこそが「なぜ人は苦しむのか」、「にもかかわらず、何らかの信仰とともに前を向いて歩くことはできるのか」という問いへの応答の核心にあるものだ。ここまで読んで、「これはきわめて個人的な書物です」という言葉の意味がわかる気がする。だが、それはまた、現代の新たな宗教思想の提示であり、グリーフケアやスピリチュアルケアとは何かという問いへの答えにもなるものだ。

三つの命題 (p48)

(A)神は全能であり、世界で生じるすべての出来事は神の意志による。神の意志に反しては、なにごととも起こりえない。

(B)神は正義であり公平であって、人間それぞれにふさわしいものを与える。したがって、善き人は栄え、悪しき者は処罰される。

(C)ヨブは正しい人である。

目を上げて未来を見る (p200～)

「それでは、私の苦しみには意味がないということなのでしょうか？」

この問いは、私がこの本で主張した見解に対する、もっとも意味深い挑戦です。(中略)

私たちにふりかかってくる不幸な出来事は、その発生時においてはなんの意味も持っていないのだと考えたらどうでしょう。それらはべつに、納得のできる道理などなしにやってくるのです。しかし、私たちのほうで意味を与えることはできます。私たちのほうで、それら無意味な悲劇に意味を持たせればよいのです。

私たちが問うべきなのは、「どうして、この私にこんなことが起こるのだ？私がいったい、どんなことをしたというのか？」という質問ではないのです。それは実際のところ、答えることのできない問いだし、無意味な問いなのです。より良い問いは、「すでに、こうなってしまった今、私はどうすればいいのだろうか？」というものでしょう。(中略)

だれのための苦難か？

「親しい人の死や苦しみを通して、私たちが自分の力や愛や快活さの限界を開いていき、以前には知らなかった慰めの根源を見出すなら、私たちはその人を、人生を否定する者ではなく、人生に対する確信を証しする人にするのです。」(p205)

「彼らを生かし続けることはできません。たぶん、痛みを和らげてあげることさえできないでしょう。しかし、彼らの死後、彼らのためにできる重要なことは、彼らを神の証人、いのちの証人とすることです。」

なんのための神か？ (p205)

ユダヤ教の伝統のなかに、「服喪者の祈祷(カディシュ)」として知られる特別な祈りがあります。これは死についての祈りではなく、いのちについての祈りであり、基本的には住みやすい善なる世界を創造した神を賛美する祈りなのです。この祈りを朗誦することによって、喪に服する者は善きものすべて、生きるに値するものすべてを、いまいちど思い出すのです。(中略)

悲惨な出来事を起こすことも防ぐこともない神は、人にはたらきかけ、人を助けようとする心を奮い立たせることで、私たちを助けているのです。ハシディズム(敬虔主義を重んじるユダヤ教の一派)を信奉する19世紀のラビが述べているように、「人間は神のこぼれ」なのです。神はガンや生まれながらの病に対して異議をとらえる方法として、それを取り除いたり、悪い人だけにそれが起こるようにするのではなく(神にはそのようなことはできません)、苦しむ人の重荷を軽くし、虚しくなった心を満たすべく、友人や隣人の心を奮い立たせるという方法をとるのです。

私たち一家は、アーロンが病気の間、思いやりと理解を示してくださった人びとによって支えられ、励まされました。……神はその人たちを通して、私たち一家に、孤独ではない、見捨てられたのではないことを語ってくれていたのです。／同じように、アーロンもまた、神の目的のために生きたのだと私は確信しています。病気であったとか、奇妙な姿であったとかいうことによってではなく(神がとくにそういうものを求める理由などありません)、自分の病気や外見によるさまざまな問題に勇敢に立ち向かって生きることによって、アーロンは神のために生きたのです。」